翻訳：トマス・ハーデイ短編　『萎えし腕』（２）
―祈祷師の提案と絞首刑の継子

大野次征*

Translation: "The Withered Arm" in *Wessex Tales* by Thomas Hardy（２）
—Conjuror's Proposal and Hanged Stepson

Jisei OHNO

Ｖ祈祷師トレンドル

翌日の午後ぎりぎりまでローダは、この祈祷師訪問から逃れんが為なら如何なる事も辞さなかった。しかし、行くと約束した身である。それに、行ってみたい気もおこる。行けば、思いのほか祈祷界で重い座を占めるに役立つやも知れぬ。

約束の時刻より早く着けるように出た。３０分速足で歩くとエグドンの丘の広陵たる南東部にきた。そこに、樅（もみの木）の造林がある。外套とヴェールを身にまとった柳腰の女は既に来ている。ローダは、ロッジの妻が左腕を肩から吊っているのを見ると、身が震えそうになった。

二人は話しを交わす暇もなく、陰気な土地の奥へ向かって上り始めた。そこは、半時間前に後にした豊かな沖積土層の土地のずっと上にあたる。長い時間歩いた。黒雲があたりを暗くしたが、今は、やっと午後に入ったばかりである。風は荒野の斜面に当たりヒューヒューと鳴り響き、気を滅入らせる―後世のリヤ王となって現われる古代ウエセックスのイナ王の苦悩した荒野と、ことによると同じ場所かも知れない。ゲアトルード・ロッジが一人で喋り、ローダは他のことに気を捕られて生返事を返すだけである。悪い腕の方を一緒に歩くのはどうも嫌でうっかりそちら側にいたらぐるりと反対に回って歩く。二人が小さな道らしい道に出た時は、ヘザーの雑木に足元を何度も払われた後のことで、その小道の傍らに求める人の家があった。

この男は治療業を公にするでもなく、また、それにこだわりはしなかった。当人の直接糊口の資を、ハリエニシダの柴、泥炭、「とげ砂」等土地の産物の商いから上げていたからだ。事実、祈祷の霊験あらたかさなど、本人も余り信じていない風で、疣の治療に来た者に診てやり奇跡的に消えた時も―消えたことは間違いないが―こう受け流す、『わしは、あんたの金で酒を一杯飲ませてもらうだけのことよ。お疣様のお陰でな、ただの偶然のことかもしれんぞ』と、言って、話しをすぐ逸らすのであった。

二人が訪ねると、この男は家にいて、谷へおりてくる女達を見ていた。白い髭に、赤ら顔。ローダを見た初めから、怪訝な顔をしている。ロッジの妻が用向きを伝えると、謙遜しながら腕を診た。

『薬じゃ治らん』と、即座に言った。『仇の仕業だ。』

ローダは、尻込みするように後ろに引き下がった。

『仇って、どんな仇でしょうか』と、ロッジの妻。

首を横に振って『それは、あんた自身が一番知ってなさるはずじゃ。お望みならその人間を見せてもやれる、ただ、わし自身は誰か分らんだろうがの。それ以上、無理だ。無理なことはしようとも思わん。』

しつこく頼まれ、男は、ローダには、今いる外で待っているいるように言うと、ロッジの妻を連れて家の中に入った。部屋の中は、戸口に面するすぐの所にある。それに戸も半開きになっていたのでローダ・ブルックには一緒でなくてもやり取りが分かった。

食器棚から大型コップを持ってくると、それに水を一杯になるまで入れた。今度は卵を１個持ってくると、何かこそこそ準備していたが、コップの縁に当てて割ると白身がぬっと器に入っていき、黄身が残った。しだいに暗くなって来たので中身の入ったコップを窓の方に持って来て、ゲアトルードに混じり合う様子をよく見ておくよ

平成１３年１１月３０日受理
*宇部工業高等専門学校一般科英語教室

うに言う。二人は一緒にテーブルの上に身を乗り出している。乳搾り女はオパールのような色の卵の溶液が水の中へ沈んで行くうちに、形をかえて行くのが見えた。しかし、そこからその形が何か、分らない距離だった。

『見てご覧、人の顔か体のようなものがわかるかな』と、祈祷師は若い女に聞いた。女は、呟くような声で答え、低い口調で、ローダには聞き取れない。コップの中を熱心に見続けている。ローダは、向きをかえると数歩離れた。

ロッジの妻が、家から出てくると、顔が外の光に当たり、顔色は―ローダと変らぬ程―荒野に生える草や雑木の寂し気で陰気な陰を背に一段と蒼白になっている。トレンドルが戸を閉めると、二人はすぐ家路を辿り始めた。だが、ローダには相手の態度がすっかり変っているのが分かった。

『沢山、お代とられました？』と、鎌を掛けてみた。

『えっ？いいえ、全然。びた一文取ろうとしなかった』と、ゲアトルード。

『それで、何と、出ましたか』と、ローダは尋ねた。

『私、何も話す気にならないの』気兼ねしているのが、態度でわかる。顔は引きつり、老け込んだ表情をしている。微かに、ローダは、夢に見た顔が思い当たった。

『ここを最初に薦めてくれたのはあなたでしたっけ』とロッジの妻は、長い沈黙の後、ふっと口を聞いた。『そうだったら、何と言う因縁でしょう。』

『違いますよ、でも、ここに来たこと私は、後悔していません。色々考えてみて』と。初めて勝ったという気持になった。横を歩くこの若い女に、人生は自分にはどうにもならない外の力が働いていることを知ってもらうのも、満更悪くはない。長くみじめな帰路、このことを再び話題にすることはなかった。だが、その年の冬、里の酪農場界隈で噂が囁かれるのは如何ともしがたい。ロッジの嫁の左腕が段々利かなくなったのは、ローダ・ブルックに呪をかけられた所為だと、言うのだ。そのローダは、夢のことを誰にも話をもらさず、顔には悲嘆の色が一層現われ、頬も痩せこけていった。春になると息子ともどもホルムストークの村から姿が見えなくなった。

Ⅵ 二度目の試み

六年の歳月がたち、ロッジ夫婦の関係は希薄になってきた、いや、むしろ、ひどくなった。この地主は、顔の表情も冴えず、物を言わぬことが多くなった。嫁の方は、その淑やかさと美貌ゆえに求婚されたのに、左手は歪み醜い。その上、子供にも恵まれず、２００年続けその辺一帯を仕切って来た家柄も最後の代になった。地主は、ローダ・ブルックと息子のことを思い出しはしたが、これも天罰かと観念した。

昔は朗らかで、開けた考えのゲアトルードも怒りぽく、迷信深い女に変って来た。一日の大半が、手に入れた眉唾物の療法を悉（ことごと）く患部に試してみるのに余念がない。けなげに夫に仕え少しでも容色を取り戻し、夫の愛を取り返さんと心密かに万が一を頼むのであった。そのため、押し入れは瓶、包み袋、軟膏壷といった全ゆる類いの物が―それどころか、幾重にも妙薬、お守り、祈祷関係の書物が詰め込まれている。女学生の頃なら具の骨頂と、笑い飛ばしたものだ。

『こんな薬屋の代物とか、「いたこ」の施した薬を飲んでいたら、そのうち体が毒漬けになってしまうぞ』と、夫がたしなめたのは、多量の薬が整然としまってあるのを、偶然見つけた時である。

妻に返事はなく、夫に悲しげな視線を向けたが、胸のうちは張り裂けんばかりの非難が込められているを知ると、夫は言葉が過ぎたと後悔したように『いや、ただ君の為を思って言っただけだよ、ゲアトルード。』

『みんな片付け処分してしまいます。二度とこんな薬に手を付けません』声はかすれている。

『うん、元気付けてくれる者が必要だな』と、夫。『一度は男の子を養子にと考えたのだが、あの子も今は大きくなってしまったし。それに、いなくなって、どこか分らない。』

妻には誰のことか察しがついた。ローダ・ブルックの身の上も年月がたつうちに分かって来たからだ。もっとも、このことで、夫婦の間で一言も交わしたことはない。それに、祈祷師のトレンドルの所に行ったことも豪も話していない。独居の丘の住人が教えてくれた（と思い込んでいるのかも知れぬ）話も夫に告げてはいない。

年令も今は２５だが、老けて見える。『結婚して６年にもなるのに夫婦らしかったのは、ほんの数カ月だけだった』と、時折、独り言のように呟く。それから、紛れもない病のもとを思い、萎えていく腕を痛ましく見つめて言った『初めて会った時のままなら』と。

妻は、素直に薬類もお守りも処分した。ところが、何か他に試したい、押さえ難い気持が湧いて来て、離れない—全く違う治療を。ローダ・ブルックに気が進まぬまま連れて行かれて以来、トレンドルの所には行っていなかった。今ふと、ゲアトルードは思いついた、まだ、その人が生きていれば、呪いと思しきものから救ってくれるのでは、と藁にもすがる気持になった。もう一度尋ねてみることにした。あの人は十分信頼に足りる。コップの中に出たおぼろげな形は紛れもなく世の中広しと言えど、こともあろうにあの女に似ていた—今ハッと分かったのだが—その女しか自分に怨みを抱く理由の者はいない。尋ねて無駄ではないはず。

今度は、独りで行った。ただ、山中で迷いそうになり、右往左往したが、ついにトレンドルの住いにたどり着いた。だが、家にはいない。小屋で待つのをやめ、遠くで働いている腰の曲がった老人の姿を認めると、そっちへ向かった。トレンドルは、憶えていてくれた。集めていたハリエニシダの一束を下に置き、男は、御一緒しようと、言って、ロッジの家の方角へ向かってくれた。道のりが相当あり、日も暮れかかっていたからである。共に歩く男は、顔が地に着かんばかりに腰は曲がり、その姿は地面と同色をなしてる。

『疣や出来物をお治しになるんですよね。これも治せないことないでしょう』と、腕をまくる。

『わしの力を買いかぶっておるよ』と、トレンドル。『それに、今はわしも、歳もとって体力もない。駄目じゃ、駄目。わしの体では無理じゃ。あんたどんなことをしてみなさったのかな。』

時に応じて試した数多の治療法や逆呪文の幾つかの名を挙げた。それをみな、首を横にふり駄目だと言う。

『なかには、成る程と、思うのもあるが』と、言いながら『だが、あんたのやった物は大体みな駄目じゃ。これは萎縮性のやつで、負傷性ではない。治療は一瞬にかかっておるぞ。』

『治るのですか。』

『治し方は一回こっきりでだ。同じような病で治らなかった者はない、胸を張れる。やるのが難しいよ。特に、女には。』

『教えて下さい。』

『その腕を絞首刑を受けたばかりの者の首根っこに当てるのだ。』

祈祷師の言う死者の姿を思うとぞっとした。

『体が冷たくならないうち—死体が索から切り落とされたすぐ後だ』と、祈祷師は、表情一つ変えない。

『そんなことが、どうしていいんですか。』

『血液を変えることで体質を変えるんだよ。だが、言ってるように、実行が大変じゃ。絞首刑が行われれる時、監獄に出かけて行き絞首刑索から降ろされるのを、じっと待っておかなくちゃならん。今まで、大勢の者を送り出してやった。だが、あんたのような別嬪は、いなかったな。皮膚病の者を数十人も昔は、送った。でもな、それは昔のことだ。最後の患者が、１３年だから、かれこれ１２年前になる。』

男は、これ以上話しはしなかった。家まで真直ぐ延びる道まで案内すると、くるりと踵を返し、初めと同じように、お礼は取らず帰ってしまった。

Ⅶ 騎馬旅行

その話をゲアトルードは、深く心にとどめた。もともと、臆病の方で、祈祷師が教えた色々な治療の中でも、これほど嫌なものはない。その実行にこれからどんな障害があるのかということは別にしても。

州都キャスターブリッジは、１２、３マイル離れたところにある。当時、馬泥棒、放火、押入り強盗などの犯罪で、巡回裁判の判決は大抵が絞首刑であった。処刑された囚人の遺体に近寄ることは、誰かの援助がなければできそうもないが、夫に怒られるのが恐くてトレンドルの提案を夫や身内にもらすことには二の足を踏んだ。

数カ月という時が、何もせぬうちに過ぎた。依然として変らぬ醜い腕を、ただ、我慢するしかなかった。しかし、美貌を元に戻して（まだ２５歳の若さ故）愛を取り戻したい女の性から、何があろうとひどい目に会わない限り、何ごとにも怯まないと、いよいよかたく決意するのである。『呪文で出来た傷は、呪文で必ず消える』と自分に言い聞かせた。それが実行できるか想像する度に、恐ろしさに身が竦んでしまう。そんな時、祈祷師の『それであんたの血が変る』という言葉は霊界的というより、科学的に受けとれる。やり遂げたい気持がまた湧いて来て、心をせき立てる。

その当時、州に新聞は一紙しかなかった。それも、夫が人から借りてくるくらいだ。だが、昔は昔流の伝達方

法があるもので、ニュースは、口コミで町から町へ、縁日から縁日へと広がっていく。だから、処刑が執行される時のニュースは、１２マイル一円で、近く予定の『見せ物』を知らぬ者が少ないほどである。ホルムストーク村についていえば、熱心な者の中には一日がかりでキャスターブリッジまで歩いて行き、処刑の場を見てくる者もいたことが知られている。今度の巡回裁判は３月である。虎視眈々とゲアトルード・ロッジは裁判の公判を待っていたが、なるべく早く宿屋へ、判決の結果を聞きにこっそり出かけることにした。

ところが、後の祭りであった。処刑が執行される時がすでに来ていて、目的地まで出かけ刑場に入る許可を急きゅうに得るには、少なくとも夫の助けを借りなければならない。打ち明ける勇気はない。というのも、見抜かれぬように、鎌を掛けてみようと、村中に広がっている迷信話しを口に出して夫を怒らせてしまったのだ。夫自身も信じている節がある。そこで、次の機会まで待たねばならないことになった。

決意に弾みがついたのは、数年前、二人の癲癇の子供がこのホルムストークの村から出かけて行って、その結果治ったのを知ってからである。もっとも、このことで隣村の牧師に強い非難を受けた。４月、５月、６月と月日は過ぎて行くが、最後の６月の末にゲアトルードは、誰か死んでと切望の気持をもったのは誇張ではない。毎夜、表向きの祈りとは裏腹に本心は、『ああ神よ、誰か罪ある人を、いや、罪なき人でもいいからすぐ、絞首刑にし給え』と、祈るのである。

さて、今度は、早めに問い合わせたし、手続きの方も全く手間ひま掛けずに済ますことができた。その上、季節は夏の、乾し草作りの時期と取り入れの間である。このため暇を利用して、夫は休暇を取り留守にしていた。

巡回裁判は、７月である。前と同じように宿屋に出かけた。処刑は一件予定が入っている。放火による一件だけ。

最大の問題は、キャスターブリッジまでどうやって行くかというより、監獄の中に入る許可をどうやって取るかである。昔なら、その目的の訪問を断られることはなかったが、今では、その習慣は廃止されていた。予想される問題を考えると、またもや夫に頼むしかないところに追い込まれる。とにかく、巡回裁判のことを打診してみると、やはり夫はけんもほろろで、取りつく島もない。全部独りでする羽目になる。

運命の女神も今までは、冷たかったが、思わぬところで目を掛けてくれる。死刑執行の土曜の前々日の木曜に、ロッジが妻に語ったところによると、共進会の仕事で一両日家を明けること、また、一緒に連れて行けぬということ。

妻は、その時、留守を守ることに嫌な顔をしないので夫はむしろ驚いて顔を見るほどであった。以前なら、楽しい旅行がお流れになればひどく落胆したからである。だが、夫は普段の無口な夫に戻り、予定の日にホームストークを後にした。

さて、ここで、彼女の出番である。初めは、馬車で行こうと思っていたが、よく考えるとそれは良くない。それでは、有料道路を行くことになるし、それだけおぞましい用件が人に知れる危険が何倍も増えるからだ。馬で行き、人通りの多い道は、通らないことにした。ただ、馬小屋には、想像を逞しくしても女の乗る馬は一頭もいない。夫は、結婚する前は、妻専用の雌馬を飼ってやると約束してくれたのだが。でも、荷車用の馬は何頭もいて、そのうちいい馬がいた。馬のアマゾネスほどに頼りがいのある馬で、背中は、大きく座り心地がいい。気分が優れない時等など、その馬に乗って、ゲアトルードは遠乗りする時があった。その馬を選んだ。

金曜日の午後、使用人が馬を玄関前に曳いてきた。妻は服を着替えると、階下に降りる前に萎えた腕に目をやると『ああ、あなたが苦しめなければ何も、こんな試練に耐えなくて済むのに』と、腕を恨んでみた。　数着の服を入れた荷を積む際、機を見て言った『この荷物は、会うことになっている人の所から今夜帰れないのも考えて持っていくのだけど。十時まで帰って来なかったら心配しないでいいですから、いつものようにお屋敷は閉めて、戸には門を掛けて頂戴な。明日は、ちゃんと帰って来ますから。』後で夫には、二人だけの時打ち明けるつもりだ。実際の行動は、伝えたことと違っているのを、夫は、きっと許してくれるはずだ。

さて、激しい胸の動悸を覚えながら、ゲアトルードは屋敷を出た。だが、目的地は、キャスターブリッジなのに真直ぐステイックルフォードを通って目的地に向かわなかった。最初は、うまく、全く反対の方向に道を辿った。だが、姿をみられない地点まで来ると、すぐ、左に曲がりエグドンの丘に向かう道を進み、丘に入ると咄嗟

に、くるりと向きを変え本来の道を真西に進んだ。州南の寂しい道を通ることは考えなかった。方角については、馬の鼻を太陽に向かい少し右の地点目指しているだけでよかった。時々、通りかかる柴刈り人か、農家の者に会うことが分かっていたし、彼等に聞いて方向を修正すればいいのだ。

時代も最近に近いとはいえ、エグドンの丘は、今日よりずっと荒野らしく、分断されたところが少なかった。麓部分の耕地化は、一進んでいるところとそうでないところがあるが一手つかずの荒れ地で、そこに入り分断し飛び地を造る試みは、余り進んでいなかった。囲い込法が機能していなかった。今では、盛り土や塀が、入会権を持つ村人の家畜を締め出しており、また、年中火を燃やしては泥炭採掘権を有する村びとの馬車の立ち入りをこれも、締め出しているが、そういうものもまだ築かれていなかった。だから、ゲアトルードは、何の障害物にも遭わず進めたが、棘エニシダや、生い茂ったヘザー、白く汚れた幾筋ものわき水、急な上り坂あり下り坂ありの行程である。

馬はとても軽快とはいえなく、遅い、だが、しっかりした足取りだ。荷役用にしては楽な歩調である。この馬でなければ、半分動かぬ腕をして、こんな道を馬に股がり進んで行くことは女にはできない。手綱を引き馬を止めると、一休みさせ、キャスターブリッジの町までもうすぐの丘の地点に辿り着いたのはかれこれ8時になっていた。耕作された平地に向かってエグドンを抜け出すことができるのは、もうすぐである。

「葦の湖」という池の前で馬を止めた。2つの生垣の両端が池を囲むようにしている。柵が中央を通って池を二分している。柵に目をやるとその向こうに緑の田園が下の方に見える。緑の木々の上から町の屋根が覗いている。屋根の向こうには白亜の平たな建物の正面が見える。州立監獄の正面玄関だ。この正面の屋根の上に蟻のようなものが動いている。どうやら何かを建てている作業員だ。女は鳥肌が立った。ゆっくり坂を下りると直ぐに麦畑や牧草地に出た。あと、半時間もすると、ほぼ黄昏れてきたが、ゲアトルードは町の入り口にある最初の旅館「白鹿荘」に到着した。

彼女の到着した姿に驚く者は余りいない。農家の女房たちは、今日以上に当時、馬で旅をしていたからだ。もっとも、女房ということでは、ロッジの妻は、人妻には見えなかった。旅館の主人も、ミーハー娘が明日の「縛り首まつり」でも見に来たくらいに考えていた。夫も彼女自身もキャスターブリッジ市に、商売の取り引きで来たことがなく、誰も知り合いはいなかった。馬から下りると旅館のすぐ手前の馬具屋の戸口付近で、男の子達が、熱心に中を覗いている。

『そこで何をやっているんですか』と、宿の主人に聞いた。

『明日の刑索を造っているですよ。』

女の胸は塗炭に動悸が激しくなり、腕の筋肉が、きゅっと、引き締まった。

『終わったら1インチいくらで売られるが』更に続けて『欲しければお嬢さん只でもらってあげますよ。』

そんなの要りませんと、急いで言った。死刑宣告を受けた者の運命が自分自身と重なって変に気持ち悪くなったのだ。一晩の予約をとり、部屋で座り考え込んだ。

今までは、監獄に入る方法をただ漠然としか考えていなかったが、祈祷師の言葉をふと思い出した。手の病の為なら、美人であることも利用して、中に入る手立てを考えよと、いうのだ。まだ、世の中のことは、未熟故に、獄吏のことは何も分らなかった。所長とか、所長代理のことは聞いたことがあるが、それも、漠然としか知らない。それでも、絞首刑人のいることは知っていた。その男に当ってみることにした。

Ⅷ 水辺の隠者

その頃から後の数年、ほぼどの監獄にも死刑執行人がいた。人に聞いて、ゲアトルードは当市の執行人は、とある深く静かな川の川岸で、一人で小屋に住んでいることを突き止めた。崖の下をその川は流れていて、崖の上には監獄が立っている。この川はあの川と同じ川の上流と、女は知らなかった。ステイックルフォードやホルムストークの牧場を潤す河の上流のことである。

服を着替え、食事をする前に一幾つかの事柄を確認できるまでは、落ち着かなかった一ゲアトルードは川辺の小道沿いの前述の小屋へ向かった。そんな訳で、監獄の外側を通っていると、正門の上の平屋根に3本長方形の柱が空を背に立っている。屋根の上で、蟻のように動いている姿を遠くから見たが、今、その建造物の正体が分かった。が、急いで歩き続けた。あと、百ヤードも歩く

と執行人の家に着いた。それは、道で会った男の子が指をさして教えてくれたのだ。家は、例の川の傍に立っていて、堰（せき）がすぐ近くにある。堰から水が一様に唸るような音をたてて流れ出ている。

思案していると、戸口が開いて、老人が蝋燭を片手にかざし出て来た。玄関に鍵をかけると、老人は小屋の端に固定した木の階段に行き、そこを昇り出した。これは、寝室に上がる階段に違いない。ゲアトルードは、急いで梯子段の下に行くと、老人はもう最上段に上がっていた。堰の音に負けぬような大声で呼びかけた。と、老人は、下を見て『何か御用かな』と、聞いた。

『ちょと、お願いしたいのですが。』

蝋燭の光は、弱い光だが、懇願する、青白い女の上向きの顔に光が差した。吊し首役人デーヴィスは、梯子段を下りて来た。『もう寝るところだが』と、言ったが、さらに、『「早寝早起き」だ。だが、あんたみたいな別嬪なら少しくらい遅れても構わん。中に、お入り。』老人は、また、戸を開けると、女の前を中に入った。

毎日している臨時の庭師の仕事道具が、隅に置いてある。町の人間ではないと分ると『田舎に行って、仕事をしてくれと、頼のまれても、わしは行けない。貴賤上下にゃ関係ない、キャスターブリッジを離れない。行けない。わしの、本当の職業は、司法役人だからな』と、堅苦しい言葉を付け加えた。

『そうです、そうです。そのお仕事が明日ですよね。』

『えっ！そんなことだと思ったわい。それが、どうしたかね。刑索のことで来ても駄目だ。いつも、かつも、人が来るがのう。だが、わしは、連中に言ってやる。仏さんのものであれば、その結び目一つ一つは、何よりも代え難いってな。で、不幸な目に遭いなさったのは親類かね、それとも、（服装を見ながら）お前さんところの雇い人かね？』

『違います。死刑は、何時ですか？』

『いつも通り―１２時、つまり、ロンドンから郵便馬車が到着した直後となるね。いつも馬車を待ってからになっている。執行猶予の通知があるといけないからな。』

『まあ、執行猶予ですって。それは困ります』と、つい漏らしてしまう。

『おや。ひっひっ。実は、わしもそうだ。だが、のう。若者なら猶予になったがいいと、言うのなら。今度の場合がそうだ。まだ、１８になったばかりで、積み上げた乾し草が燃えた時、たまたま、居合わせたのじゃよ。だが、猶予の心配はないわい。この男は見せしめに死ななきゃならんのだ。近頃、こんな風で財産の破壊行為が多いからな。』

『私が、言いたいのは』と、女は説明した『魔除けに、え―、病気治療にその人に触りたいのです。治療の話しをしてくれた人のお世話ですけど。』

『へ―、あんたがね。やっと、分かった。これまで病人が来たが、あんたが、血を変えて欲しい人には見えんかった。病気は、どんな病気かね。効かない病気と、思うが。』

『腕なんです』躊躇しながらも、萎えた腕の皮膚を見せた。

『ほー。これは、たちの悪いやつだ』と、よく見ながら言った。

『はい。』

『なるほど』と、興味深そうに続けた『これは、一級ものだ、間違いない。傷の様子が気に入った。これまで見たことのない、治療のし甲斐があるものじゃ。寄越したのは、祈祷師だな。まあ、誰でもいいことだが。』

『必要なこと、全部何とかしていただけませんか』と、一気に言った。

『本来なら、所長のところに行かなくちゃならん。一緒に医者を連れて。それから、住所・氏名を言って。まあ―、そんな風に昔はやっていた、記憶を辿れば。だが、少しの代金で何とかなるかも知れん。』

『まあ、すみません。その方がいいんです、私も。人に知られたくないものですから。』

『恋人に知られるのは嫌なんだね。』

『いいえ、主人です。』

『おや、そうかい。遺体に触りたいのじゃな。』

『どこにありますか』震えながら聞く。

『あるかって？いるかだよ。まだ、生きている。あの暗い所の上にある小窓の中だ。』上の絶壁に立つ監獄のことだ。

女は、夫や友人達のことを考えていた。『あ、勿論、生きていますよね。それで、どういう具合にしたらいいでしょうか』と、聞いた。

女を戸口の方へ連れて行くと『いいかな、塀の小さなくぐり戸の所で待っているのじゃ。細い道を上がったところだ。１時前に、内側から開けてやる。わしは、処刑

が終わるまで昼はとりに帰らんからの。じゃ、お休み。遅れぬようにな。それに、見られたくなかったら、ヴェールを被って来るのじゃな。のお、わしには、ちょうど、お前さんくらいの娘がいたが。』

女は、その家を後にした。自ら上に続く細い道を上った。明日くぐり戸が、すぐわかる為だ。おぼろげな輪郭が直ぐ、分かった—獄内の外壁にある小さい門だ。坂が急で、くぐり戸まで来ると、ちょっと立ち止まり息をついた。振り返り水辺の小屋を見ると、執行人が、再び、外の階段を昇って行く姿が見えた。屋根裏まがいの寝室に入るため、その階段を昇っているのだ。数分も経つと、明かりが消えた。

町の時計の鐘が１０時を打った。女は最初に来た道を白鹿荘に戻って行った。

Ⅸ 巡り逢い

土曜日の午後。ゲアトルード・ロッジは、前述の監獄の第二門内の待ち合い室に座っている。第二門の上は切り石積みの古風なアーチ型の道が通っている。当時として比較的モダンなもので、「州立監獄、１７９３年建立」と銘板がつけてある。これは、正門玄関で昨日、ヒースの丘から見た建物だ。直ぐ近くに、屋上に上がる路がある。屋上には絞首台が立っている。

町はごったがえしている。市場は休みだ。だが、ゲアトルードの目には、人の姿は入らなかった。約束の時刻まで、室にじっとしていたが、その場所へ至る道は野次馬が集まっている崖下の空き地からは、離れたところにある、小道である。だが、そこにいても大勢の野次馬たちの声が聞こえる。そのがやがやと騒がしい声より一段と高い、しゃがれ声が、時々、聞こえる。『死際の話しと懺悔の言葉を！』と、言っている。執行猶予もなく、死刑は執行された。それでも、群集は遺体が、降ろされるまで待っている。

やがて、まんじりともせず待っていた女は、頭上でどんどんと踏みつける音が聞こえ、次に、手が合図している。指示に従い、女は外に出ると守衛詰所の向こうの中庭の舗装を横切って行った。膝ががくがく震えてもう歩けない。片方の腕は、袖から出している、ただ、ショールで隠してはいるが。

さて、辿り着いた場所には二台のうまが置いてある。何の為か、頭が巡らぬうちに重そうな足どりで、階段を下りて来る音が女の背後に聞こえる。振り返る気力も体力もない。そのまま、動けないでいると、雑な作りの棺が女の肩の高さで運ばれて行くのを意識した。４人の男が運んでいる。蓋は開いたまま中には、若い男の遺体が入っている。男は、質素な上着に綿と麻の反ズボンを着ている。遺体は棺桶に無雑作に放り込まれたらしく上着の裾がはみ出している。柩（ひつぎ）がうまの上に一時置かれた。

その時、若い女の心の異常は頂点に達し、目は白い靄が張ったようになった。それやら、被（かぶ）っているヴェールのせいでまともに何も見えない。死んだも同然でいたが、何か電流でも通ったように立ち上がった。

『ほら』と、近くで声がした。その言葉が、自分にかけられたからだ。

最後の力を振り絞って前に進んだ。同時に、後ろに人が近づく音がした。女は、憐れな己の、呪われた腕を露にすると、死刑執行人は死体の顔から覆いを外し、ゲアトルードの手を取り、それを死者の首に押しつけてくれた。半熟ブラックベリーのような青黒い縄跡が一本首の周りについている。

ゲアトルードは、ぎゃーと、叫んだ。「血の流れ」と、祈祷師が言っていたことが、実際、起ったのだ。だが、その瞬間２度目の絶叫が、塀内一帯を引き裂いた。ゲアトルードの叫びではない。声の凄さに驚き振り返った。

真後ろにローダ・ブルックが、立っている。顔は引きつり泣き腫らした目は赤い。ローダの後ろには、ゲアトルードの夫が立っているではないか。顔は皺をつくり、目は霞んだようにしているが涙はなかった。

『何てことだ。こんな所で何やっているんだ』と、かすれ声。

『ひどい女—私達と息子の間に今後に及んでも入り込んで』と、ローダが大声で言った。『これよ。悪魔が夢の中で、私に見せようとしたのは！あんた、とうとうあの悪魔の顔そっくりになったわね。』若い方の女の露に出した腕をむんずと掴むと、抵抗もしない女をひっぱり壁に押しつけた。ブルックが、手を外すと、かよわな若いゲアトルードの体は夫の足元に倒れかかった。

二人を見ただけで、処刑された若者がローダの息子であることを伺い知るに余りある。その当時、処刑された囚人の身内は、望めば遺体を引き取り埋葬する権利があ

されていた。また、その後も何度か呼び出されていた。審理中は法廷に出ていた。これが、最近、夫が取っていた「休み」のことだった。惨めな親たちは、人目を避けていた。そこへ両人自ら遺体を引き取りに来たのだが、人目を忍ぶためのシーツを張った運送用の馬車を外に待たせていた。

ゲアトルードの具合がひどく、最寄りの医者を呼んだがよかろうということになった。そこで、監獄内から町に運ばれた。だが、生きて帰ることはできなかった。華奢な身は、腕の麻痺に活力を奪われ、極度の精神的、肉体的緊張から二重の痛手を受け倒れたのであろう。その緊張もこの２４時間続いていた。例の血液も確かに「流れた」。ただ、それが過ぎたのだ。町に運ばれて３日後、女は息を引き取った。

夫の姿は、その後、キャスターブリッジで再び見かけられることはなかった。ただ、よく出かけていたアングルベリー村の古市場で、一度だけ姿を見せたが、その後、人の往来のあるところで見られなくなった。夫は、初めのうち、ふさぎ込み自責に苦しんでいたのだ。だが後に、回復し温厚で思慮深い人になって姿を見せるようになった。哀れな若妻の葬儀に出た後すぐ、ホームストークと隣教区にある畑を手離し、また、牛も一頭残らず処分すると、夫は州内の反対の端にあるポート・ブレデイという町に引っ越していった。そこで、独居生活をしていたが、２年後肺の病いを罹ったが、苦しみもせず死んでいった。その時、分かったのは、少なからぬ財産を少年救護院に全て遺贈したこと、また、ローダ・ブルックには行方が分り次第要求があれば、ささやかな年金受給の条件がつけてあった。

しばらくの間、行方が、分らなかったが、彼女も遂に元いた教区に、また、姿を現わした。しかし、あの遺産条項は関係ないと、きっぱり断った。酪農場での単調な乳搾り作業が、また、始まった。その後何年も続けていたが、やがて腰も曲がり、かっては豊かな黒髪も白くなり、額の生え際は、擦り切れている。牛の体に長い間押しつけているためであろう。ここで、女の身の上を知る者なら、足をとめ、よく女を見ながら、どんな恐ろしい考えが、あの無表情で皺深い額の奥で、次々に湧き出ているのかと、思うはずだ。交互に絞り出す、ほとばしるリズムに合わせて。

参考文献

Gove, P. B. *Webster's Third New International Dictionary*. Springfield: G. & C. Merriam Company, 1967.

Kuiper, Kathleen. *Merriam-Webster's Encyclopedia of Literature*. Springfield: Merriam-Webster, Incorporated. 1995.

Mee, Arthur. *I・SEE・ALL*. rept. London: The Amalgamated Press, 1998.

Murray, James A. H., Bradley, Henry, Craigie, W. A. and Onions, C. T. *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press, 1961.

Pearsall, Judy. *The Concise Oxford Dictionary*. 10th ed. Oxford: Oxford University Press, 1999.

Pinion, F. B. *A Hardy Companion*. London: The Macmillan Press, 1968.

The Holy Bible. King James Version. New York: American Bible Society.

寺澤芳雄監修　『英語語源辞典』東京：研究社　1997。

『舊新約聖書』東京：日本聖書教会　1995。